
涙色の空に

櫻庭 伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙色の空に

【Nコード】

N9997A

【作者名】

櫻庭 伊織

【あらすじ】

僕はロボットだから。彼は私にそう言って、いつもと変わらない笑みを私に贈った。どうしてだろう、そんな彼の横顔がとても切なく見えた。そんな彼が見つめる先には・・・涙色の空

プロローグ

所詮、僕の体は鉄で継ぎ接ぎされた物だから。

僕は、僕の横で笑う人間のように温もりを持っていないから。

そうだ、僕はロボットだから。

僕には感情がない。感情なんていらない、ロボットだから。
笑う事も泣く事もいらない、僕にとっていらぬ物だから。

そう、僕はただのロボットだから。

笑っていても、それは僕の電腦頭脳にインプットされたモーシヨ
ンの一つ。

少しだけ、楽しそうに笑っている人間が羨ましかった。

僕には持っていない物を持っているように感じた。

何だろう、このモヤモヤした感じは。

僕の手には温もりはない。

だって、人間じゃないから。

僕は一人ぼっちなロボットだから。

所詮、僕は鉄の塊の人形。

こんな僕でも、
感情のない僕でも、
誰かを好きになることって許されるのかな？

プロローグ（後書き）

初めまして、櫻庭 伊織といたします。一応恋愛物にするつもりなのですが、まだ未定なところもあります。それでも最後まで読んでいただくと嬉しいと思います。

1 - 1 彼の事

「ねえ、華枝ちゃん。さつきから何を見てるの？」

バスに揺られて、もう30分は過ぎた頃。私の隣に座った、光一郎は不思議そうに私が熱心に読んでいる本を指差した。

「ん？なんでもないよ。」

「えー、教えてくれたっていいじゃないか。」

強引に本を覗き込もうとした光一郎を押さえつけて、自分の鞆に本をしまい込む。

「意地悪だなあ。」

頬を膨らます光一郎を見ると、どうしてもロボットだという事を忘れてしまう。だけど、私の記憶に存在する光一郎は今私に見える光一郎と何一つ変わらない。身長だって、表情だって、髪型だって、体重だって変わってないに違いない。

それなのに、彼はロボットだと思えないくらい人間のようなのだ。

季節はもう冬、バスの窓の向こうでは雪が降っているのに、光一郎は学校の制服を着ているだけで防寒着など一切身に纏っていないのだ、見てるこっちの方が寒くなってしまつて堪らない。私が何度注意しても光一郎は平気な顔をしてこう言うのだ。

「全然大丈夫さ、僕には体温調節機能が付いているからね。」

そんな事言われたもさっぱり理解できないのに、それに、町を歩いているとやっぱり光一郎一人だけ浮いてしまつたいるのに、彼自身気づいてないみたいだしね。

学校前のバス停でバスを降りて、校門までの道のりを歩き始める。いつもより早く家を出たせいか同じ制服を着た生徒の数が少なく見える。

「まあ、結局見せてくれなかったし、意地悪だなあ。」

そう言って、もう一度頬を膨らます光一郎。・・・やっぱり人間だよ、笑ったり、泣いたり、怒ったり、喜んだりする彼は誰の目から見ても人間にしか見えないよ。

「あ、華枝ちゃん。今日は部活？」

「え、あ、うん、6時まで部活だけど先に帰ってる？」

私は合唱部に所属している、光一郎はいわゆる帰宅部に所属している。部活のない日は一緒に帰っているけど、部活の日は光一郎の気分によって変わってくる。

彼は私が17年間生きてきた中で一番とっていいほどのマイペースな人間、もといロボットなのだ。そんなマイペースな光一郎だからこそ、周りに人が集まってくるのかもしれない。

「んー、今日は残ってようかな。最近、華枝ちゃんが歌ってるのも聴いてないからね。」

「もー、違うでしょ、合唱部のみんなが歌ってるんだから。」

私がかこう言くと、彼はいつもの如く、

「僕には人間の声を聞き分ける機能があるから、華枝ちゃんの声だけ聞いてるんだよ。」

なんていう、何とも聖徳太子じみた発言をしてしまうのだ。

そんなことを合唱部のみんなが居る前で言ってしまったもんだから、光一郎は合唱部から目の敵にされてしまっているのだ。それでも図々しく合唱部が歌ってる真ん前でニコニコしながら私の歌ってるのを聴いてしまっているのだ。

「ねえ、さつきから何考えてるのさ。」

「んー、別に。ほらっ、急がないと遅刻しちゃうぞ！」

「何言ってるんだよー、華枝ちゃんがボーっとしちゃうってたんだろー。」

でも・・・

そんな、マイペースで図々しい光一郎の事が、私は好きだったりするのだ。

1 - 1 彼の事（後書き）

どもー、櫻庭 伊織です。文章が下手だと自分で実感しております。。。。もっと進化できるように、もっともっと勉強していきたいと思っております。。。

今回はヒロインの華枝が登場しました。これから、運命の歯車は回り始めるわけですね、はい。では、次回1 - 2、「鞆の陰に」をお待ちになってください

1 - 2 鞆の陰に（前書き）

まず最初に、前回の1-1を読んでくださった人へお詫び申し上げます。当初予定していた「昼下がりの動揺」の前にひとつ話を入れてしまった事、深くお詫び申し上げます。

1 - 2 鞆の陰に

「ずいぶんと眠そうですね、華枝ちゃん。」

教室に入ると、一番の友達の本里が私の席の所までやってきた。

秀困気的にはタンポポの綿毛というのが一番ベストだろう。性格も良くて、顔だって可愛らしい、別に誰かと付き合つとかに興味の無い私だって羨ましくなるぐらい真里はもてるのだ。

「ポーっとしてると、私が食べちゃうぞ。」

がしつと、女の子とは思えないほどの力で私の顔を両手で固定しがぶつとかぶり付く動作を真似して、ケラケラと笑う真里を見て私は思わずため息が出た。

基本的に朝に弱い私は、今のテンションの本里とまともに会話すらできなくなる。そうじゃなくても、ここ何日かろくに寝てないんだ。

「梓くんにつってるマフラーの方は順調？」

「んー、ちょっと、わかんない所があるんだけど、昼休みいいかな？」

「いいに決まってるじゃないかあ、じゃあ、昼休みにね。」

そう言つると同時にチャイムがなる。そしてそれと同時に、私たち2年B組担任の牧原 早苗先生が入ってくる。先生になって2年、ちょうど私たちがこの学校に入学してきた時に新任の先生だ。どんな事があつてもチャイムと同時に教室に入ってくる事がすでに生きた伝説とまでなっている、私の通う名物先生の一人だ。

「・・・皆さん、おはようございます。今日は特に連絡が無いので問題を起こさないように気を付けて生活してくださいね。」

正直、誰も問題を起こさそうなんて思う人なんかこのクラスには居ないと思う。今じゃ笑顔の似合う英語教師なんぞをしているが、高校時代の早苗先生はある族のナンバー2と呼ばれるほどの不良だったらしい。この先生を切れさせたらきつと誰も手なんか付けられなく

なってしまうかもしれない、そう思うだけで私たちは普通の高校生として生活できてしまうのだ。

「それで、何がわかんないの？」

「うんとさ、イニシャルの所の縫い方なんだけど本読んでもなかなか理解できなくて。」

編みかけのマフラーと編み物セット、それに今朝バスの中で読んでいた本を鞆から取りだす。

「本読むよりは見たほうが理解しやすいと思うから、ちょっと貸してみて。」

編みかけのマフラーを真里に渡すと、真里は何でもないようにイニシャルの部分と普通の部分を器用に編み始める。それだけじゃなく、私にもわかりやすく説明を加えながら編んでいる。とつというまに梓 光一郎（A・K）のAの3分の1が出来上がっている。

「今教えたみたいになれば、きっと華枝ちゃんでもうまく編めるはずだよ。」

「ありがとう、それにしても真里って器用だね。」

明らかに、私と真里の編んだ部分の違いは一目瞭然だ。

「ありがとう、でも、何で急にマフラーなんて編みたいなんて言ったの??」

理由は一つ。

たった一つ。

光一郎と一緒に過ごせる最後のクリスマスに私にも彼にも一番の思い出を作るため。

私は、どうしてもマフラーを編まなければならないのだ。

1 - 2 鞆の陰に（後書き）

さて、櫻庭 伊織です。今回は光一郎は出てきてませんね。。。
（主人公なのに）さて、次回こそ1 - 3「昼下がりの動揺」をお楽しみしててください。

1 - 3 昼下りの動揺

5時限目、授業は体育。私はあんまり体を動かすのが好きじゃない、別に運動音痴とかそういうのじゃなくて、とにかく体を動かすのが好きじゃない。でも、好きじゃないだけであって、別に嫌いだというわけでもない、やる時はやると決めているのだ。

「今日は先生が出張らしいから自由だって、華枝ちゃんは何する？」

何故かノリノリな真里。その手には2本のバトミンソンのラケットが握られている。きつと、私が「何でもいいや。」なんて言ったら、真里は力尽くで私とバトミンソンをやるだろう。

「んー、休んでようかな。」

真里がニコニコ顔のまま固まる。ここで真里の相手をしようものならば、やっぱり力尽くで私はバトミンソンをさせられてしまうんだろう。私はそんな真里を無視して外でサッカーをしている男子の方を見に行く。今日はD組と合同の体育で光一郎のクラスと一緒に体育をする事になっている。

「んー、彼氏の応援かね？華枝くん。」

防寒着を着込んで男子のサッカーを見ていると、隣りに由菜がエロ親父のようにニヤニヤしながら座ってきた。同じ合唱部に所属するちよつと変わった友達だ。

「違うよ、ただ見てるだけ。」

冬だというのに元気にボールを追いかけている光一郎が私に気づき、恥ずかしいくらい大きく手を振っている。それに応えるように私はちよつとだけ微笑んで見せる。

「まったく、どこが付き合っていないって言うのよ。」

「からかわないですよ。本当に、ただの幼馴染だから。」
そう、ただの幼馴染み。

私はいつからかそうやって言い訳をしてきた。

中学校の時もよく付き合ってるんじゃないかと言われてきたが、ずっと否定してきた。光一郎は別に顔が悪いわけでもないし、性格だって他の男子と比べたらいい方だと思う。それでも、私はずっと否定し続けてきた。

きっと、光一郎がロボットだから。

私とは違う、ロボットだから。

どんなに人のように見えてても、地球が破滅しそうになっても、彼が人間じゃないという事実は変わらない。

だから、私はずっと否定してきたのかもしれない。

一番近くにいたのに、一番彼を理解できてなかったのは私だったのかもしれない。

何だろこの気持ちは。。。

今まで感じもしなかった、このドキドキしてる感じは。。。

「ねえ、正直に言っちゃいなよ、華枝つて光一郎の事好きなんですよ？」

そうなのかもしれない。

だって、

彼のこと、光一郎の事を考えてるとこんなにも胸がドキドキしちゃうんだから。

私は、彼のこと大好きみたいだ。

1 - 3 昼下りの動揺（後書き）

はい、桜庭 伊織です。。

文法が下手すぎてごめんなさい。もっと勉強したいと思ってるので許してください。

さて、次回 1 - 4 「笑顔の向こう」お楽しみに〜

1 - 4 笑顔の向こうに

僕が生まれたのは17年前。ある少女が生まれた日、僕の活動も一緒に始まった。

起動してすぐに、僕は病院に連れて行かれた。初めて乗った車っていう乗り物は道を歩いている人間よりもはるかに速いスピードで移動していた。

「お前の名前は梓光一郎だ。わかったな？」

車に乗ると隣に座った男の人がそう言った。梓光一郎、それが僕の名前らしい。

「あの・・・これからどこに行くんですか？」

「病院だ、お前に合わせなければならぬ人がいる。」

無愛想な感じのする男。ほとんど感情のこもってない声。まるで僕のようなだった、笑いもせずただ前を向いているその人間は、本当にロボットのようだった。

病院で会う人物こそ、桜花華枝である。これから18年、ほぼ一緒に生活する事になる少女である。華枝は人工授精で作られた子供だと、後々知ることになる。学歴だけで数百万、数千万と値の付けられた精子によって作られた子供。

僕にはよく理解できないけど、今の時代学歴と言うのが重要らしい。そんな物で幸せになれるのかは知らないけど、その時会った華枝の母親の顔はとても満足げだった。

「あなた、女の子ですって。」

思ったよりも人間の赤ちゃんは小さく見えた。お世辞でも可愛いなんて言えない、でもどこか愛嬌のある顔、僕は華枝に見入ってしまった。僕の隣りに立っていた男の人の顔が初めてにこやかに笑った。別にロボットではないらしい。華枝の頬を微かに撫でる男の顔は無愛想なんてという言葉は似合わなくなっていた。

「友、こっちは梓光一郎。あのプロジェクトで作られた物だ。」

「そう、やって完成したのね。これからよろしくね、光一郎君。」

とても綺麗な人だと思った。生まれたての僕には思い出がないはずなのに、僕はこの人のことを知ってるような気がした。

「あ、あの・・・その赤ちゃん、名前は。」

「華枝、いい名前だと思うでしょ？」

華枝、僕が初めて華枝という名前を認識した日。それは、雪の降る、寒い寒いクリスマスの夜だった。

華枝の頬に恐る恐る触れようと手を伸ばす。そんな僕の人差し指を華枝はぎゅっと握り締めて離さなかった。

「あらあら、華枝ったら、光一郎君のことが気に入ったみたいね。」

そんな様子を見ていて、華枝の母親が楽しそうにクスクス笑った。いつまで経っても華枝は僕の指を離さなかった。離れたかと思えば、またぎゅっと握る。その繰り返しは何回も続いた。

僕は・・・何だか、嬉しかった。

僕には体温がない。人間のように暖かい手をしてるわけではない。僕は人間じゃない。

でも、それでも華枝は僕の指を握りつづけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9997a/>

涙色の空に

2010年12月14日18時02分発行